

道徳教育用教材（中学校3学年用）

千葉市に生きる

夢 思いやり チャレンジ



千葉常胤像



「昆陽先生甘藷試作之地」記念碑



救命講習会



千葉公園野球場

千葉市教育委員会

はじめに

本市では、「夢と思いやりの心を持ち、チャレンジする子ども」を育てることを目標に、学校教育の充実に取り組んでいます。

この教材には、本市の歴史を築いた千葉氏をはじめ、人々の命を救った偉人の青木昆陽さん、皆さんの生命を守っている千葉市消防署の方々、そして市民の憩いの場所である千葉公園が登場します。

皆さんには、教材に登場する人物の立場や気持ちになり、友達の考えを聞いたり自分の意見を述べ合ったりすることを通して、これまでの自分を振り返り、これからの自分の生き方を見つめてほしいと思います。

本市の歴史に愛着と誇りを抱きながら、自分の夢に向かいチャレンジする気持ちですが、皆さんに育まれていくことを願っています。

指導課長 伊藤 裕志

目次

1	夢を探して	1
2	背番号のないユニフォーム	5
3	救命バイスタンダー	9
4	八九〇回目の夏	13

夢を探して

中学最後の総体も終わり、夏休みに入った。すでに数日経つが、全くやる気が起きない。私は幼い頃からお菓子作りが好きで、将来パティシエになりたいと思っていたのだが、その夢も今はぼんやりとしている。夏期講習に行き始め、次の目標に向かって進んでいる友達姿を見ながらも、何となくだらだらと過ごしていた。そんな時、母に声をかけられた。「陽子、暇なら親戚のところを持っていく手土産を買ってきてくれない？いつもとちよつと違うものがいいいから、あなたのセンスで選んでくれるとうれしいわ。」
母に言われた通り、買い物に出かけた。

「親戚への手土産を探しているんですけど、何かいいものはありませんかと、お店の人に尋ねた。」

「そうですね、さつまいもを使ったお菓子はどうですか？」

「えっ？なんでさつまいもなんですか？」

「昔から千葉はさつまいもとゆかりがあるのよ。幕張に昆陽神社こんようがあるでしょう。」

「昆陽神社？」

「芋神様が奉まつられているのよ。」

「はあ：。」

「知らない人にもお土産話になりますよ。試食してみますか？」

見た目は素朴だが、食べてみるとさつまいもの甘さが口に広がり、想像以上においしか

ったので買うことにした。

親戚の家へ持っていくと、お菓子はとても喜ばれた。皆口々に、「千葉らしいお土産だ。」とか、「昔、青木昆陽のことを習った。」などと楽しそうに話をしていた。

数日後、インターネットで事前に調べてから、京成幕張駅のすぐ近くにある昆陽神社に行ってみた。境内にある案内板に説明が書かれていた。昆陽は、江戸時代、徳川吉宗より飢饉（注1）から人々を救うように命じられ、自分が学んだことを生かし、現在の千葉県内の数カ所でさつまいもの試作をした人だ。成功したのが幕張の土地だった。その後、幕府によって栽培が広まり、全国の何万人という人々を飢餓から救った。その後にも続いた大飢饉でも、さつまいもによって多くの人々の命が救われた。特に幕張では一人の餓死者も出さなかったと言われている。

昆陽神社の鳥居の向かい側には、小さな囲い地がある。「昆陽先生甘藷試作之地（注2）」の碑（注2）があり、それは大正八年に建てられたものだそうだ。さらに、その試作地碑の右側には昆陽没後二百年を記念して建てられた顕彰碑（注2）もあった。

実際に行ってみて、今もなお多くの足跡が残っている青木昆陽に興味を持った私は、もう少し調べてみたくなり、今度は図書館へ行った。

昆陽は魚問屋の一人息子として江戸に生まれ、幼い頃から勉学に励んだ。本格的な学問をしたいと願ひ、反対する両親を説得して、約二年間、京都で儒学と本草学（注2）を学んだ。本草学は病に効果のある動植物の研究をする当時最先端の学問だった。その後、両親の看病

をするため、江戸に戻ることとなり、自分が学んだことを生かすことができないう現実に向
面した。その六年後、真面目さや博学さから幕府より飢饉救済を命じられ、さつまいもの
研究を行い、試作に取り組んだ。しかし、栽培が始まると、「さつまいもには毒がある」
などといううわさから、反対する人たちも現れた。追い打ちをかけるように、種芋の大半
が腐ってしまった。苦難が続く中、諦めず栽培を続け、大切な芋がイノシシに食べられな
いように、そのすぐそばで寝泊まりし二十四時間監視をした。雨の日も風の日も毎日畑に
通い、百十七日間、一日も休むことなくさつまいもの栽培の様子をうかがった。昆陽の栽
培成功によって、関東全体で栽培が広がり、人々を飢えから救ったのである。

しかし、昆陽の仕事はまだ終わらなかった。さつまいもをあまねく普及させるため、自
分の経験と知識の全てを一つの書物に注ぎ込んだ。二年間をかけて、栽培の仕方を現在で
いうマニュアルにし、庶民にもわかりやすいように、漢字仮名混じりで書き上げた。その
五十年後、再び関東を飢饉(注3)が襲ったが、その飢饉を救ったのがまたしてもさつまい
もだった。また、さつまいもは江戸の飢饉のみならず戦時下の日本の食生活も救ったのだ。

いろいろ調べてみて、後世の人々が青木昆陽を「芋神様」と慕い、神社を建てたり、亡
くなった命日にお祭り(注4)を行ったりする理由がわかった。さらに、さつまいもを使っ
た名産品を生み出し、さつまいもが地域に親しまれていることも納得できた。昆陽とさつ
まいものことを考えているうちに、何だか「さつまいもアイス」が食べたくなった。最近
食べていなかったこのアイスは、お菓子のレシピの中でも自分が得意なものだ。早速作り
始めたら、母がのぞきこんできた。

「あら、何をはじめたの？なんだか楽しそう。やっぱり、陽子はお菓子を作っていると生き生きしているわね。」

「じゃましないでよ。」

と言葉を返したが、気持ちはどこかうれしかった。私は、さつまいもをながめながら、青木昆陽のことを思い浮かべた。アイスクリームを冷やしている間、久しぶりに明るい気持ちで、元気がわいてくるのがわかった。しばみかけていたパティシエへの思いがまた膨らんできた。

☆なぜ、青木昆陽は多くの困難を乗り越えることができたのでしょうか。

☆あなたは、自分の夢や目標をどのようになんていきましたか。

(注1) 一七三二年 享保の大飢饉(江戸四大飢饉の一つ)

(注2) 表紙の写真参照

(注3) 一七八二年〜一七八五年

の最大規模の飢饉(天明の大飢饉(江戸四大飢饉

(注4) 東京・目黒区の甘藷祭り



背番号のないユニフォーム

春季大会、最終回ツーアウト。ランナーなし。五対四で僕らがリード。「翔平、落ち着いて行けー。」

ベンチにいる貴司が、声をかける。「任せておけよ。」心の中でつぶやく。思いっきりボールを投げる。ピッチャーフライ。「勝った。」と内心想った僕は、ゆっくりとグラブを上には伸ばした。ベンチで、ガッツポーズをする貴司たちが見える。

「あっ。」その瞬間、ボールはクラブをかすめ、グラウンドに転がった。しまった。急いで駆け寄りボールを拾い一塁に投げた。アウト。勝った。

しかし、僕はその場から動けなかった。右足首の猛烈な痛み。はく離骨折、全治六週間。

その日から、僕の生活が、変わった。白いギブスに松葉杖。ギブスを外しても、すぐに前のようには動けないだろう。夏の総体に間に合わないかもしれない。

試合の数日後、僕は足をかばいながら、背番号『1』を顧問の先生に返しに行った。試合が終われば、背番号を返すのはいつものことだ。しかし、今日の僕は違っていた。うつぶさかげんで言った「ありがとうございました。」の声もかすれたままだった。「痛みはどうだ。大変だけど、今の状態で何ができるかを考えてごらん。」と言った顧問の先生の声も、なぜだか遠くに聞こえた。

教室の中では帰りの会が終わると、雰囲気が一変する。それぞれが自分の部活動の仲間と今日の練習場所や内容について話しながら、シューズを手にしたり、ラケットを抱えたりして、思い思いの活動場所へ移動していく。なんだか、教室にいるときよりも、みんな生き生きしているように見える。

僕は帰宅の準備をする。けがをしている僕には、カバンを取るのだって一苦労だ。野

球部で仲のいい貴司の姿はもうなかった。冷たいやつだな。少しは助けてくれてもいいだろうに。思うようにならない現実にイライラしたり、落ち込んだり……。

家に帰っても、何も手につかない。やる気が出ない。今までは、家でのクラブの手入れを欠かしたことがなかった。母が、「どんなに練習で疲れて帰ってきてても、それだけは感心するのよね。」と言うことがあった。そんなクラブも、あのけが以来触っていない。どうしても、そういう気になれないのだ。早く帰宅する僕に、弟がまとわりついて話しかけてくる。なんでもない弟の言葉が、妙にかんにさわって、兄弟げんかが増えた。母の「お兄ちゃんなんだから、我慢しなさい。」と言う言葉がさらに僕の気持ちをいらだたせる。

学校では、貴司たちと休み時間を過ごすのは変わらない。野球部のメンバーが態度を変えてきたとも思わない。それに、今の野球部の様子が気にならないわけでもない。それでも、やはりどうしても野球部の話題を避けていた。

そんな僕に貴司が、

「あれから部活にも顔を出さないし、おまえ今のままでいいのか。」

その言葉が言い終わらないうちに、僕は怒鳴っていた。

「うるさいな！おまえに俺の気持ちの何がわかるんだよ！」

その後、貴司は驚くでも、怒るでもなく、ただじっと僕の目を真っ直ぐ見ていた。

その後の授業は、何も頭に入らなかった。なんだよ……。今まで勝ち上がってきたのは、僕が投げたからなんだぞ。どんなプレッシャーにも耐えて、チームを勝利に導いてきたのはこの僕なんだぞ。

登校は、父の出勤のついでに車で学校の近くまで送ってもらっていた。その日は、出張ということで、朝練に行っていた時間より早く学校に着いた。教室に行くには早すぎるな。僕は、けがをしてから避けていた部室に行ってみることにした。まだ誰もいない

はず：と思っていたら、物音と話し声が聞こえてきた。貴司と光だ。

「ようし、ボールの準備、オッケーだ。昨日の校庭の泥のぬかるみがひどかったから、ボールが泥だらけだったものな。」

「これで、朝練に間に合うな。貴重な練習時間だからな。」

二人は、ボールや用具を部室の外に出し始めた。「えっ、二人は毎日こんなに早く来て準備をしていたのか？」翔平は、毎朝、面倒くさいと思い、朝練の時刻ぎりぎりに駆け込んでいた。そういえば、一年生の時は、用具の準備をしていた気がする。でも二人は、三年生になった今でも続けていたのだ。

光が貴司に聞いた。

「翔平のけがの具合は、どうなんだろう。」

「けっこう重いけがだったから、野球が大好きな翔平が一番つらいと思うんだ。簡単に大丈夫かとか、がんばれよとは言えないよな。」

「ああ、言葉じゃないよな。僕たちには翔平を待つことしかできないんだから、せめて、翔平が帰ってきた時にもっと強くなっていたいよな。」

「うん。やっぱり、翔平と一緒に千葉公園野球場に行こうぜ。」
二人は、用具を持って校庭に向かっていた。

僕はその場から動くことができなかつた。なんて自分勝手だったんだろうと、とてつもなく恥ずかしくなつた。自分の実力にうぬぼれていた。エースだからと、自分のための練習しかしてこなかつた。でも、貴司と光たちは違った。そして、一番恥ずかしいと思つたのは、そんな友達の存在に気付けなかつたことだ。

背番号を返した時に言われた顧問の先生の言葉が、よみがえってきた。このチームの中で今の自分にできることはいったい何なのか……。

ケガがだいぶ回復してきたある日、僕はグラウンドに立った。まだ、本格的な練習にはついていけないものの、ボール拾いや、道具の準備などできることを精いっぱいやった。そして、一番変わったのは、今まであまり話さなかった控えの投手に対して、アドバイスするようにしたことだ。

夏の総合体育大会。僕は、メガホンを持ちスタンドから声援を送った。僕の背中には背番号はない。でも、夏の強い日差しと木々の緑が心地よい。昭和二十四年に開設された千葉公園野球場は、六十回を超える総体が行われ、今までに何千、何万という、僕らのような中学生を見守ってくれている。

☆何が翔平の気持ちを変えたのでしょうか。
☆自分の心を動かした友達の行動や言葉について、
考えてみましょう。



救命バイスタンダー

和也の通う学校では、毎年「命を守る教育」という学習会が開かれる。消防署の方やボランティアの方の協力を得て行う救命講習会だ。

和也の脳裏に二年前のことがよみがえった。あの日、和也は友人との待ち合わせのために急いでいた。すると、目の前を歩いていたおじいさんが急に苦しみだしたのだ。驚いた和也はおそろおそろ声をかけた。

「大丈夫ですか：？」

「うー：。」

おじいさんは苦しそうにうめくだけだ。どうしていいかわからない和也はおろおろするばかりだった。すると通りかかった女性が異変に気付き、声をかけてくれた。

「おじいさん！大丈夫ですか？大変！救急車を呼びますね。」

和也は内心「助かった」と思った。自分一人ではどうにもできなかつたからだ。

ほっとしたのも束の間、

「私は救急車を誘導するから、あなたはおじいさんを見ていてね。」

そういうと女性はすぐさま走り出し、姿が見えなくなってしまう。

（見ていてと言われても何を見ていれいいのか：。）

そうこうしているうちに周りに人が集まってきたことに気が付いた。でもみんな遠巻きに見ているだけだ。救急車はなかなか現れない。まわりから「救急車、遅いな。」という声がかきこえてきた。でも和也は何をすることもできなかつた。ただ、戸惑うだけだった。十五分ほど経っただろうか、遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。

救急車が到着すると、その場には安堵の空気が流れた。救急隊の人たちが手早くおじいさんを救急車に乗せ、

「どなたか倒れた時の様子がわかる方、いらっしやいませんか。」と尋ねた。救急車を呼んだ女性が和也にも声をかけたが、突然苦しみだしたことしかわからぬ。和也は何となく自分が責められているような気持ちになった。救急車が走り出し、人垣がなくなっても、和也はその場からしばらく動くことができなかった。

（あのときどうすればよかったのか？そして、あのおじいさんはどうなったのか？中学生の自分では救急車を呼ぶのが精一杯だっただろう。しかもその救急車がなかなか来なかったじゃないか。）

和也には救命講習会はなんとなく気の重いものだった。

救命講習会当日。和也は四人のグループで、千葉市消防署に勤める坂本さんから心肺蘇生法を教えてもらった。人形を使って、心臓マッサージをしたり、人工呼吸をしたりした。AED（注1）の使い方も教わった。会の後半は、それぞれのグループで質問をすることができた。俊介が口を開いた。

「ニュースで、救急車をタクシー代わりにしている人が増えている、という話を聞いたことがあります。市民のマナーに問題があると思うのですが。」

坂本さんは力強くこう言った。「わたしはそのタクシー代わりという言葉が嫌いです。救急車を要請したということは、それぞれ困っている人がそこにいるということなんです。その人をどう救うかが救急隊の役割で、市民に安心を与えるのが私たちの任務です。だからどんなに誤報の可能性があっても念のために確認に行くんです。」

それを聞いた和也は驚いた。

（消防局の方が不満をもらさないなんて…。）

市民のマナーが悪いのを内心怒っているのではないかと思っていた。そして坂本さんの答えに恵理子が質問した。

「でも、私は救急車がなかなか来てくれないので困ったことがあるんです。本当に困っている人のところに真っ先に行ってほしい。」

坂本さんは複雑そうな顔をしながら答えた。

「そうですね。そこはわたしたちにとってでも悩みなんです。救急車の数が限られているなかで、どの通報が緊急性を要するかを正確に判断して出動させるのは難しいことです。救急救命士の数を増やしたり、二十四時間体制で医師の指示を受けられるようにしたりして、増加する要請に応え、できる限り多くの命を救えるように努力もしています。P A連携（注2）の取り組みも行っています。そして、AEDの普及活動にも力を入れています。中学生の皆さんに教えているのもその一環なんですよ。」

坂本さんはさらに続ける。

「でも、私たち救命救急士がどんなに頑張っても、『バイスタンダー』にはかえません。和也は聞いた。」

「バイスタンダーって何ですか？」

「バイスタンダーというのは、救急現場に居合わせた人のことを指す言葉なんです。救急車が到着するまでに、その場に居合わせた人が行う心肺蘇生法などの応急手当が救命率を大きく左右します。実際にそういう事例も多くあるんですよ。」

坂本さんはにっこりと笑って最後にこう言った。

「救命救急士の仕事がしたい、って言うってくれる人が増えるとうれしいですね。」

家に帰ってからも和也は落ち着かなかった。今日は驚くことがたくさんあった。バイスタンダーか。和也は気になって、千葉市消防署のホームページを開いてみた。

坂本さんが言っていたようにいくつかの事例が載っていた。「スノーパーで倒れていた男

性を店員がAEDを使って救命した。「お母さんの心肺蘇生で赤ちゃんを救命した。」心
肺停止になった男性を職場の同僚が救命した。」などが紹介されていた。

「そういえば、中学一年生が踏切に倒れていた女性を救助したという話もニュースで見
たことがあるわよ。」

パソコンを覗き込んだ母が教えてくれた。船橋市の中学校のサッカー部生徒四人が、部
活動帰りに線路内に倒れている女性を発見し、自力で立ち上がることができない女性の
もとに駆けつけ、発車しようとしている電車にジャンパーを振ったり、非常ボタンを押
しに行ったり、119番の通報をしたりしたそうだった。

「自分も一緒にひかれたらどうしようかと思って、心臓がバクバクした。」「恐怖心はな
かったけど、頭が真っ白でおばあさんを助けることしか考えられなかった。」と言ったそ
うだ。すぐ近くにいる人の力によって救われる命があるんだ…。

数日後、和也の手には学校で渡された『短時間救命講習参加証』（注3）が握られてい
た。

「よし、今度は普通救命講習を受けてみるぞ。」

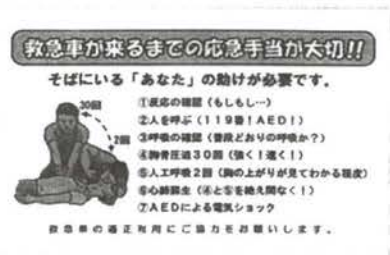
☆和也は、なぜ坂本さんの話に驚いたのでしょうか。

☆もし、あなたが救命現場に居合わせたとしたら、バイ
スタンダーとしてどのような行動をとるでしょう。
また、どのような行動をとりたいですか。

（注1）自動体外式除細動器

（注2）消防車と救急車が連携して救急活動を行うこと

（注3）九十分間の救命講習会。修了証書は下の写真参照。



八九〇回目の夏

ダダン、ダダン、ピーヒャララ。

今年も、千葉神社で最も大きなお祭りの季節が近づいてきた。夏の例祭「妙見大祭」である。恵子はその音をぼんやりと聞いていた。恵子も子どもみこしを小学校の頃までは毎年担いでいた。あんなに楽しみにしていたお祭りだったのに中学生になってからは何となく疎遠になり、お神輿みこしを見に行くこともなくなった。恵子の祖父や父はお祭りに向けて水を得た魚のように生き生きと準備をしている。今はその姿を冷ややかに見つめている恵子がいた。恵子はお祭りの日に手伝うように母から言われた。

「今年もお祭りの手伝いしてね。」

「えー、なんで手伝わなくちゃいけないの？もう三年なのに。勉強しなくちゃいけないんだから。」

「それくらいの間作れるでしょ。」

その後も恵子は、いろいろと理由を付けて母に訴えたが、聞き入れてもらえず、結局は手伝うことになった。

今日はお祭りの初日である。母に言われてしぶしぶ千葉神社の裏にある町内の休憩所に手伝いに行った。とても暑い日で、じっとしていても汗が出てきた。

（やっぱり学校に行けばよかった。来なければよかった。）

恵子はため息をついた。目の前を『ドント打て音頭』の踊りを先頭にお銚車ほこぐるま、お囃子車はやし、そしてお神輿がにぎやかに通っていく。恵子は神輿を担いでいた小学生のころを思い出しながら、お茶やおにぎりの準備を手伝った。



しばらくして踊っていた人やお神輿を担いでいた人たちが休憩所にやってきた。みんな真っ赤な顔をして大汗を流している。恵子はみんなに冷たいお茶とおにぎりを渡した。みんなが、「ありがとう。うれしいね。」

「いただきます。生き返るわ。」

と笑顔で言ってくれるのを聞いて、恵子は嫌々やっていたことに少し後ろめたさを感じた。そこへ年配の女の人が声をかけてきた。

「若いのにえらいわね。あなたもこのお祭りが好き？私は久しぶりに見に来たのよ。結婚して遠くに行ったから来られなかった。」

懐かしい。本当に来てよかった。

恵子はその女性にもお茶とおにぎりを渡した。彼女は恵子にお礼を言い、幸せそうにおにぎりを食べていた。その女性がお祭りや千葉をなつかしんでいる様子に恵子はなんだかとても心が温かくなった。

恵子はその夜、その話を父にした。父は、「うれしいことを言ってくれる人がいるね。恵子も知っているだろ？今年は八九〇回目のお祭りだったんだよ。妙見大祭は一一二七年に一回目が始まって以来、一度も途切れたことがないお祭りなんだ。」

妙見大祭は十六日から二十二日までの一週間行われる。このお祭りは、その年の豊作を願い、日照りや水害、病気などの災害をなくすようお願いするものだそう。そういえば恵子は今までお祭りについて何も知らず、何も考えずに参加していた。恵子は、

妙見大祭について調べてみることにした。

次の日、恵子は千葉市立郷土博物館に行き、学芸員さんに話を聞いたたり、調べたりしていくうちに、千葉神社は、千葉氏ちばし（注）との関わりが強いことがわかってきた。千葉一族は代々、現在の千葉市を含めた広い地域を統治していた。東京がまだ湿地帯だったころのことだ。千葉氏七代目の当主である千葉常重つねしげは一族の本拠地を亥鼻いのほな付近に定め、一一二六年に館を構え、その時に信仰していた妙見大菩薩ほさつを北斗山ほくとさん金剛授慈寺こんごうじゆじ（今の千葉神社）に祀まつった。千葉市ではこの年を千葉開府の年としている。千葉氏は亥鼻山から金剛授慈寺のあたりに家来や町民を置き、農民も含め町を形成した。それが現在の千葉市にまで繋がっているわけである。八九〇年もの昔に千葉氏が私たちの住む町いしずえの礎いしずえを作り、今に至っていることを知った恵子は、自分たちの祖先がそんなに昔から千葉氏を中心として町を発展させてきたということに驚きを感じた。そして、自分たちの町のお祭りである妙見大祭が千葉氏に大きく関わっていることにも気付いた。

七日目、お祭りの最後の日である。町内の休憩所には初日とは打って変わって生き生きと取り組んでいる恵子の姿があった。あんなに嫌だった手伝いが今日は少しも苦にならなかつた。ふと見ると、父が年配の男の人と親しそうに話している。父が、恵子の視線に気が付いて恵子呼んだ。恵子を紹介するためだ。

「娘の恵子です。今、少し千葉市の歴史に興味を持ち始めたみたいですね。恵子、この方は千葉さんという方だよ。」

「千葉さん？」

「そう、あの千葉一族の子孫の方だ。」

「いやあ、直系じゃあないけどね。常胤の直系は一四五五年に滅亡したからね。若い頃

は子孫なんて言われるととても嫌だったけどね。そうか、恵子さんは千葉市の歴史に関心があるのか。それはいいことだね。」

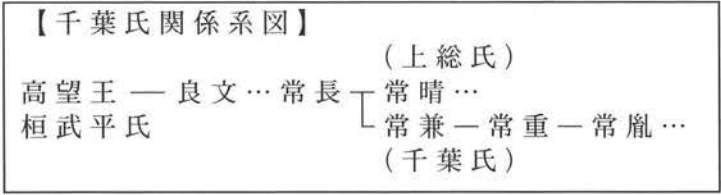
千葉さんは今、千葉市の産業や観光、文化の継承のために活動している。また、千葉市を題材にした映画等のロケーション誘致なども提案している。

「千葉市の中には国際的に広がる要素がいっぱいある。今一番考えていることは古い日本を新しい時代にどう合わせていくかということだ。その要に千葉市がなっていないかなくてはならない。今、もともとは千葉市出身ではない人たちの子どもが、千葉市で活躍し始めている。これから、千葉市で生まれた子どもたちが、一度は外で働いても最後には戻ってくる、そんな町にしていきたい。」と熱く語ってくれた。さった。

千葉一族の子孫が今もこの千葉市のために活動している。
(なんてすごいことだろう。私も千葉市のために何かできるかしら。)
と恵子は思った。

☆最後の日の手伝いに生き生きと取り組めたのはなぜでしょう。
☆あなたは、これからどんな千葉市にしたいと思えますか。
そのためにあなたができることは何ですか。

(注) 千葉氏…桓武平氏良文流。坂東八平氏・関東八屋形の一つに数えられる下総の豪族で、守護大名・戦国大名の一つ。常重の時から千葉介を称する。常重の子、常胤は源頼朝に加勢し、鎌倉幕府の成立に大きく貢献した。千葉氏を地方豪族から大御家人の地位に登らせ、千葉氏中興の祖といわれる。



「道徳教育用教材（中学校 3 学年用）・千葉市に生きる」作成委員

●学識経験者

千葉大学教育学部 教授 土田 雄一

●委員長

千葉市立犢橋中学校校長 佐々 一哉

●委員

千葉市立幕張西中学校	大森 育子
千葉市立稲毛高等学校附属中学校	岡村 忍
千葉市立蘇我中学校	梶原 明日馨
千葉市立さつきが丘中学校	唐澤 晶子
千葉市立新宿小学校	川島 恵子
千葉市立大椎中学校	菅 整
千葉市立貝塚中学校	齊藤 優
千葉市立泉谷小学校	佐藤 晃代
千葉市立こてはし台中学校	高野 夏希
千葉市立花園中学校	中村 幸栄
千葉市立本町小学校	長谷川早由里
千葉市立犢橋小学校	森 美香

●千葉市教育委員会事務局

指導課長	伊藤 裕志
指導課統括指導主事	小坂 裕皇
指導課指導主事	岡田 直美

平成 28 年 3 月

編集者 千葉市教育委員会
印刷者 株式会社 プリンテクス

発行者 千葉市教育委員会
千葉市中央区問屋町 1 - 35